

Make で生きる 創客たちの楽園 Maker Faire Shenzhen 2015

わずか3年でアジア最大のメイカーフェアとなった深圳をレポート

高須正和のアジアンハッカー列伝

MakerFaire Shenzhen 2015 は、3 日間の会期に 193,600 人の観客、280 の出展ブースを備えた、アジア最大のメイカーフェアとなった。世界最大のベイエリアに並ぶ規模のフェアで、おそらく来年は世界最大のフェアになると思う。

僕は今回、実行委員として会期前からしばらく深圳にいた。実際の出展物、プロジェクトの話はこちら（リンク）に書いたのですが、ここではスケールの話を書きたい。

SF に登場するような、「住民みんなが Maker で、ずっと Make だけで生きている」街があり、そこでは生物が遺伝して突然変異して進化するように、モノが生まれているのだ！



キャプション：会場になった、深圳市南山区軟件産業基地(Software Industry Base)

国を挙げて Make で生きる街深圳

深圳は、昨年 12 月に李克強首相が深圳の MakerSpace 柴火創客空間（Seedstudio が運営しているメイカースペース。中国語では Maker を創客と当てる）を訪問し、会員名簿にサインして帰ったことに象徴されるように、国を挙げて Make に全力を出している。

深圳には秋葉原の 30 倍大きいと言われる世界最大の電気街、華強北がある。ラジオデパートのような密度でヨドバシカメラのような大きさの巨大ビルが 10 棟以上集積し、世界中の部品が問屋卸で手に入るプロトタイパーには夢のような場所だ。華強北で売っているものは深圳の周りで製造されている。まさに産地直売で部品や完成品が売られ、分解さ

れ、再利用されている。裏道に入ると道ばたで大量のスマホを分解しているおばさんたちがいる。壊れて捨てられたスマホから加速度センサ・バッテリー・メモリチップなどのまだ使えそうな部品を抜き出し、部品ごとに集め、中古部品として再販売するのだ。この、生産／消費／再利用が一体となった様子を、MIT メディアラボの伊藤穰一は世界の製造業のエコシステムと呼んだ。

とはいえ、これはあくまで「製造」業にすぎない。アメリカ人とか日本人が発明して設計したものを製造しているのが深圳の役割で、それはメイカーとは別の種類の生き方のはずだった。これまでは。

深圳が製造業の中心地になって数十年がたつ。分解して部品を再利用できるぐらい、コピー品が作れるぐらいに、深圳の街には設計・開発能力が蓄積されていて、熟練のエンジニアたちも集まっている。**Kickstarter** で見られるような小ロットの発明品、メイカーが市場に出そうという最初の一步は、多くは発明家が深圳に協力工場を見つけて、一緒になって作っている。深圳の人たちが自ら **Kicksterter** に製品を出すことも増えてきた。

かつて製造だけを請けおっていた街が、今は発明そのものや、すくなくとも「発明家の手伝い」ができるようになってきた。一方で単純な組み立て、言われたとおりに動く仕事は、もう給料が上がってきたこの街から、中国の奥部やベトナムなどにシフトしつつある。

今年、深圳は大きく方針を変更した。製造業の中心地としての蓄積を生かして、「発明・発明家の手伝いをする街」に。つまり、メイカーの街が誕生したのだ。

その華強北を代表するビル **SEG ELECTRIC Market** には今、「創客中心」の文字が高々と掲げられている。世界で一番大きい電気街が、「**Maker** の中心」と大看板を出しているのだ。

半年前に深圳を訪れたときはこのサインはなかったので、すごい勢いで全体を **Make** に向けているのがうかがえる。



キャプション：創客中心の文字が躍る電子市場ビル

■準備だけで数週間、街をあげて MakerFaire

今回の MakerFaire 深圳は、一角まるごと新しく造成したソフトウェアパーク深圳市南山区軟件基地にて行われた。



キャプション：近代的なビルが建ち並ぶソフトウェアパーク。

ソフトウェアパークが、まだ重機の音が途絶えず、テナントもほとんどが営業開始前の状態。メイカーフェア業務のほとんどを行っている **Seedstudio** も、フェア2週間前にこちらに移ってきたばかりだ。

広大なソフトウェアパーク全体に **Maker Faire** のバナーが張られ、街区すべてがブースに変わっている。



キャプション：ビルの側面全体に MakerFaire のバナーが



キャプション：街区はすべて屋外ブースに変わる



キャプション：MakerFaire 深圳の会場

会場を地図ソフトで見たところ、縦横 600m*200m ほど、120,000m² ほどの面積が MakerFaire に使われている。もちろん多くのスペースはビルが建ち並んでいるわけだ

が、幕張メッセ全部のさらに倍ぐらいのスペースのなかにブースが並んでいるわけだ。



キャプション：街区のあちこちにスローガン「I'm A Maker, 人人都是創客(We are makers)」が並ぶ。

この人人都是創客(We are makers)は、別の日に DongGuang 市中山大学を訪ねたときも大書されていた。

僕は2週間ほど前に現地に入ったが、そのときから準備は途切れなく続いていて、MakerFaire 1週間後に現地を訪れたときもまだ撤収作業は続いていた。街をまるごと巻き込み、会場の設営だけで数週間を要するような大きなイベントということなのだろう。

急成長した深圳の Maker シーン

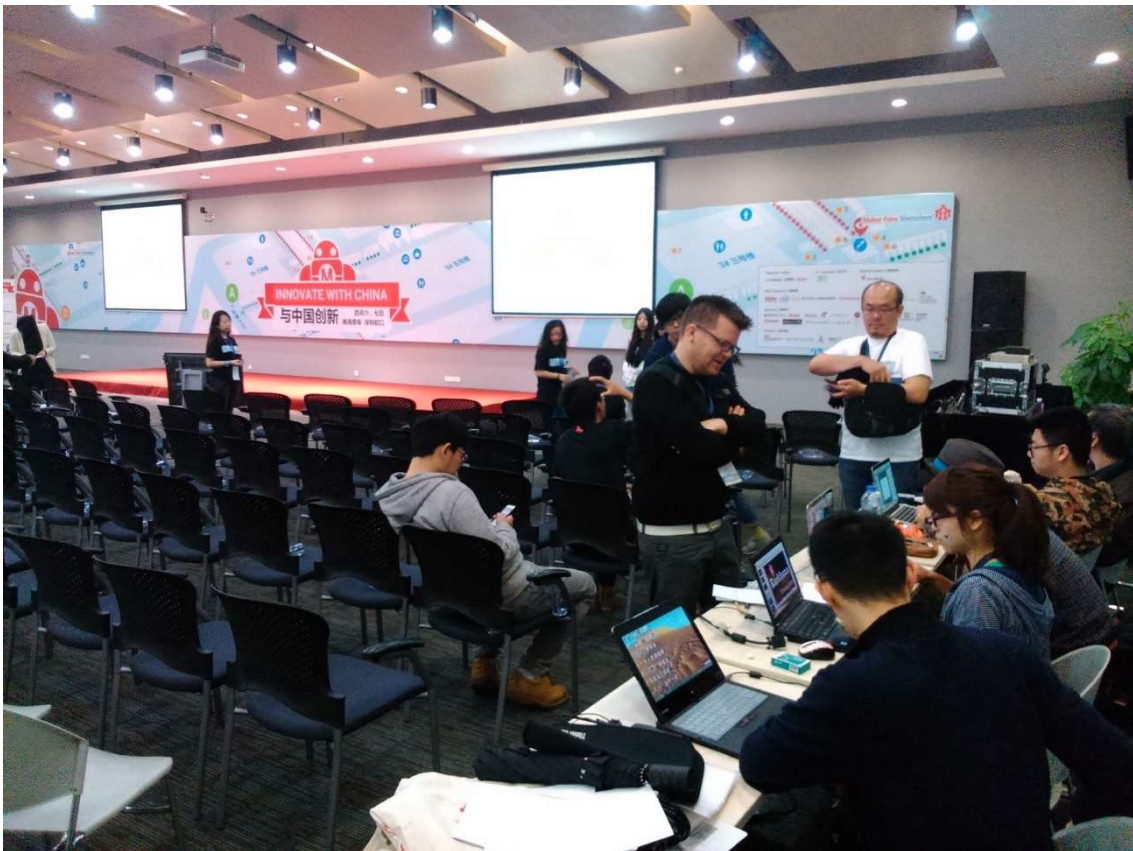
深圳の Maker シーンは昔からあったものではない。僕が 2014 年の 12 月に訪れたとき、市内で創客の文字を見かけることはほとんどなかった。

中国で最初のメイカーフェアが開かれたのはこの深圳、2012 年 4 月のことだ。深圳の Maker 支援企業 Seeedstudio は、PCB 基盤作成サービスの FusionPCB を 2008 年から展開し、Grove Kit など、初心者やベテランまで世界中の Maker を対象にビジネスを広げている。深圳の Maker シーンは成長を続け、翌年 2013 年 4 月に東京で開かれた Maker Conference で、社長のエリック・パンは「世界の Maker のなかで最もすごい人」と小林茂先生に紹介されている。2014 年の MakerFaire Shenzhen は 3 万人の入場者を集め、アジア最大のメイカーフェアとなった。僕は去年はじめて深圳を訪れて、レポートを書いて

いる。

去年のフェアもすごく楽しめるものだったが、今年はさらに 6 倍に拡大した、国内のフェアからは想像しづらいものだ。20 万人弱という来場者は、コミケやニコニコ超会議に匹敵する。どの参加者も「全部見た」とは言えないサイズのものになる。

去年までの MakerFaire Shenzhen は、Seedstudio が主催していた。会場を借りる、スポンサーを集めるなどの作業含めて一社が行っていたわけだ。2014 年当時の Seedstudio の社員は 80 名ほど。超会議を運営するドワンゴに比べるとだいぶマンパワーが少なく、かつ生産ラインで働くエンジニアなどさすがに業務から外せない（あと、英語使えないと運営スタッフはきつい）人たちも多いから、体感では英語得意なマーケティング系の 20 人ほどが走り回って運営を回していたように思う。



キャプション：去年のフェアの様子。その後友達になったスタッフも多いので、後で写真を見返すとどここのセクションの人だかわかる。英語得意なマーケティング系のスタッフ 20-30 人ぐらいが走り回っていたように思う

今年から主催が変更になり、柴火创客空間(Chaihuo MakerSpace)と南山区政府（中国の行政で言う区は日本で言う市ぐらいのレベル。南山は大きい区で、東京 23 区や政令指定都市ぐらいの力がありそう）の主催、協力に深圳市投資控股有限公司（政府系投資ファンド。深圳市は、日本で言う県や都ぐらいのレベル）、特別協力に万科企業控股有限公司（中国で一番大きい不動産デベロッパー。六本木ヒルズを作っている森ビルとか、そういうサイズの企業）となった。

柴火创客空間は SeedStudio がすべて出資した MakerSpace だが、Maker すべてのための公益的なものだ。今回のフェアを、深圳市の力が結集されたパブリックなものとするた

めに、主催が **MakerSpace** となった。

つまり、わずか半年で全体が **Make** に向けて結集されたのだ。政府の力が強い国はこういうところが強い。

深圳は製造業の街である。深圳だけで 1000 をはるかにこえる設計／製造の工場があり、隣の **Donguang**, 広州などにはさらに大きなスペースを必要とするスクーターや 3D プリンタ、自動車などの工場がある。深圳だけで東京と同じぐらいの人口を抱えているので、首都圏よりも大きな面積と人口がほとんど製造業をやっている（ソフトウェア産業も最近発展しているが）と考えると想像しやすいと思う。

とはいえ、大量ロットをひたすら組み立てまくる工場としては、もはや最適地ではない。人口と土地、最低限の安全さえあればゼロから生産ラインを組み立てられる **FOXCONN** や自動車メーカーといったビッグプレイヤーたちは、中国の奥地や、ベトナムやインドネシアといった新興国に進出している。1980 年代から急激な発展を遂げた深圳は、人件費も土地代も上がり、もはや「安価を求めてくる場所」ではない。

でも、30 年間世界の製造業の中心として育った熟練工や金型職人がいる。

もちろん、「お上」が指示して差配すると、イベントとしては疑問符がつく。大プロモーションが始まると、よくわからないけど流行り物に乗りたい人たちが入ってくる。深圳での **Maker** は、バズワードの性質もある。

MakerFaire 深圳の基調講演は、世界の **Maker** サポートビジネスの代表者 **Seedstudio** のエリック・パンが、深圳の歴史について語るプレゼンから始まった。

<https://www.youtube.com/watch?v=hYMpURi-LoU>

(Enbed お願いします)

キャプション：6 分ぐらいの短いスピーチに示唆が多く詰まっている。

今の深圳の過熱ぶりについて、「**Maker**(創客)が、すごく知られるようになったことで、言葉だけが一人歩きして、最近では **Maker** って名前のヘアサロンまで登場した」なんて苦笑交じりにプレゼンしていた。



■しかし、僕らは今も笑っている！

エリック・パンのプレゼンは、自分たちの歴史について、「2008 年に自分たちが趣味で **Make** を始めたときは、楽しみのために太陽光を集めて火をつけるみたいなことをやっていて、お金を生むことなんてできていなかった。でも、多くの **Maker** が海外から深圳にやってきて、自分たちのアイデアを深圳の人たちと協力して実現化しはじめた」という話から始まる。

そして、深圳に世界の **Maker** が集まり、**Seedstudio** が 300 人近い大企業になった今、**Maker** のビジネスがお金を生むようになって自分たちの世界が変わり、中国の首相が深圳の **Maker** スペースを訪れて、大量の起業家が深圳から生まれるようになった今について、「だけど、ぼくらは今も笑っている。パッションは同じだ。」として、**Arduino/Genuino** プロジェクトの **Co-funder**、**Massimo** を紹介して終わる。

僕は深圳は今も、**Maker** とコミュニティの街だと思っている。他の国とは違う形かもしれないけど、大きくなって有名になって、パッションが失われたとは思わない。

深圳のフェアに、どういうパッションの産物が集まったかはこちら（リンク）。

告知です。

7月25日（土）-26日（日）東京・秋葉原の **DMM.Make AKIBA** にて、出展自由の物作り系イベント **NT 東京 2015** を行います。また、去年大好評だったギーク向けダンスパーティー「新宿 **Aki Party**」を 25 土曜日の夜に行います。

こちらもお出展・来場お待ちしております！

7月29日水 17時から、今回の記事でも登場した **SeedStudio** のエリック・パン氏と僕が、明治大学中野キャンパスで講演を行います。こちらぜひご参加ください。